

2010 年度 大学入学式 式辞

新入生の皆さん、ご入学おめでとう。ご家族の方々もさぞかしお喜びのことと拝察いたします。受験生活が終わって、新しい大学での生活が始まろうとしているこのとき、あれもしたい、これもしたい、と希望に胸を膨らませておられることでしょう。実はかくいう私も、この大学では新入生です。みなさんと一緒に、大学の学風を学びながら馴染んでいきたいと思っています。ただ私の半世紀に亘る長い大学生活のなかで得た一つの経験を、この大学での最初の日、皆さんにお届けしたいと思います。

それは、こういうことです。いろいろな大学で、入学試験のときの成績と、4年間の学生生活を終わって卒業していくときの成績とが、どのように関わりがあるか、調べてきました。ほとんど例外なく、両者の間には際立った関係はないことが判っています。つまり、入学試験の成績がとても良くても、卒業のときはさほどではないことも珍しくないし、入学試験の成績があまり優れていなくても、卒業のときは抜群な成績を修める例も多いのです。ところが、大学1年生の終わり、つまり大学へ入って最初の1年が終わったときの成績と、卒業するときの成績の間には、かなり濃厚な相関関係があることが判っています。もちろん学業の成績だけが、大学生活のすべてでないことは、申すまでもないでしょう。ただ、ここで判って欲しい大切な点は、大学へ入って過ごす最初の1年が、皆さんのその後の大学での生活にかなり大きな影響を持っている、ということです。その意味で、これから始まる1年という歳月を、特に大事にして下さるようお願いしたいと思います。

さて、ご承知のように、この大学の設立の理念の基礎は、キリスト教の信仰にあります。そのことに期待をもっている方も、あるいは不安を抱いている方もあるでしょう。無論ここが日本の大学である以上、皆さんも日本国憲法によって守られています。その第二〇条には、信教の自由がはっきりと謳われています。したがって、この大学でも、キリスト教信仰への強制的な勧誘は断じてありません。と同時に、信教の自由は、信仰を持つ人々の権利も保証しています。そのことも忘れないようにしましょう。

ただいづれにしても、これからの国際化された社会と時代に生きていこうとする皆さんが、宗教に対して豊かな理解を持つことは、とても大切なことです。それはキリスト教に限りません。イスラム教、ユダヤ教、仏教、ヒンズー教などはもちろん、さまざまな宗教が社会を造り、時代を造り、歴史を造ってきました。そのことを無視して、社会と時代を、あるいは世界を理解することは不可能です。この大学は、学問を通じて、そうした宗教に関して理解を深めるのにとっても適した場所であると信じます。それは国際化社会を生きる人間として、必須の教養の一つであり、それを身に付けることは、皆さんの将来にとって大きな財産になるでしょう。

一つだけ例を挙げましょう。今日は4月2日、信者の方はご存知ですが、実はキリス

ト教では「聖金曜日」あるいは「受難の金曜日」と言われる特別な日です。私たちもですが、ヨーロッパや南米では、一般の市民がほとんど1日何も食事をしないで、キリストの十字架上の死を思いながら過ごします。教会のなかは暗い紫の色で覆われています。そしてあさつての日曜日、よろこびに溢れた復活祭がやってきます。聖職者の着る衣装もすべて目の覚めるような純白になります。復活祭は、クリスマスのように日が決まっています。毎年暦の状態から決められます。今年は4月4日の日曜日となります。日本ではクリスマスは誰でも知っていますが、ヨーロッパでは、復活祭はクリスマスよりもっと大きな社会全体のお祝いの日であり、またその前の四十日間は四旬節と呼ばれて、社会全体が喪に服するような状態が訪れます。

イスラム教のラマダーン(イスラム暦の9月のことで、太陽暦とは少しずれています)もまた、似たような社会習慣です。この1ヶ月ムスリムは夜明けから日没まで食事をとりません。それが明けた3日間のお祭り(イド・アル・フィトルと言いますが)はまた、イスラム社会にとって、大きな喜びの日々になります。

私たちは、日本にいと、なかなかそうしたことに理解が行き届かないままに過ごしてしまいます。しかし、日本から一歩外へ出て、異文化に入ったとき、こうしたことが

らを^{わきま}弁えておくことは必須になるのです。

このことは、実は単なる教養を超えて、人間の最も核心的な問題と関係しています。それは、他者、自分とは違った人、あるいは自分とは違った文化、考え方を知る、ということです。自分とは違ったものに出会い、それを理解しようとするのは大変なことです。それは時としては、自分にとってあまりにも当然であり、振り返ってもみなかったことを疑わなければならないからでもあります。そして他者を知ることは、結局のところ自分を知る、自分を見つめ直しつつ前進していくことになります。(人間科学部：みなさんの学部は人間科学部です。またその中でも子供が大切なキーワードにもなります。本田和子先生という方が、子供は大人のひな型ではない、大人とは違った文化のなかに生きる人々だ、という意味のことを言われたことがあります。子供を理解することもまた異文化理解の一つかもしれません。)(国際社会学部：みなさんの学部は国際社会学部です、国際社会では常に異文化との接触到にさらされます。その時自分の常識、自分の価値観に^{こだわ}拘っていたのでは、他者の理解は不可能です)。

そして、大学というところは、まさしくいろいろな意味で、他者との出会いの場なのです。というのも、大学で出会う学問は、これまでみなさんが受けてきた教育の方法とは少し違って、多くの問題に唯一の正解がないからです。さまざまな考え方、さまざまな可能性が提示されるのが、学問の姿なのです。そのなかから自ら選択をすることが求められます。それはもしかすると、今までの自分が突き崩されるような体験を伴うかもしれません。実際私も、55年前大学でそうした経験を重ねたことを思い出します。

もう一つ言わでも、のことを付け加えます。皆さんは今日から「生徒」ではなく「学生」になりました。年齢としては未成年のかたが大部分でしょうが、学生という立場は、一人の自立した人間として、自分の行動に責任を担わなければならない存在です。大学のなかではもちろんのこと、外でも、そのことが社会から当然のこととして期待されています。この東洋英和女学院大学というコミュニティの一員としての自覚を持って行動してください。そしてこのコミュニティから受動的に何かを受けとろうとするばかりではなく、このコミュニティを維持し、発展させていくために一人一人が何ができるかを考えて、積極的に行動してください。私たち教職員は、そうしたあなた方を、力をつけて助け、支えることを約束します。

2010 年 4 月 2 日

東洋英和女学院大学 学長

村上 陽一郎